クチキコオロギの越冬をみた

法西　浩
（ひとはく地域研究員）

クチキコオロギの越冬を観察（写真：1）

2013年1月6日（日）早朝、JR武田尾駅を降り、武庫川渓谷大峰山麓と検見山麓をはさむ谷川を登る。林床の朽木を割って、越冬中のオサムシを探す作業をしていた。豊家のそばの積み重ねられた松の倒木の幹の皮を剥がしていると、樹皮下にコオロギのメス個体が現れた（写真：1）。日本で最大のエンマコオロギとほぼ同大、体長35㎜、背部には小さな水滴が付着していた。動作はにぶいが、どうやら生きているようだ。飼育するために持ち帰る。

写真：1　クチキコオロギ♀

本種は、写真家であり、バッタ目（直翅目）の専門家の伊藤ふくおさんに同定をお願いした。紙面をお借りして厚く感謝申し上げる。

クチキコオロギの飼育の試み、失敗

持ち帰った朽木くずと、クワガタ飼育用マットを等量まぜ合わせ、虫篭に入れてその上にこの個体をのせ北側の温度変化の少ない部屋で、春までそのまま保管することにした。

この個体は観察を続けていたが動きが全くない。3月2日虫篭を調べると、死亡し背部には白いカビが生えていた。

クチキコオロギとは

本種はマツムシ科に分類され、主に東南アジアに17種が知られ、日本には4種が分布する[1)]。大型、オスの翅は短いが発音する[1)]。メスはごく短い翅がある（写真：1）。周年発生、昼は朽木の洞や樹皮下に隠れており夜間に活動する[1)]。

兵庫県下で観察、記録された産地について

生態については、「ひょうご身近なレッドデータいのちのまほろば」（2003）に載っている[2)]。ここには洲本市の三熊山での生態が紹介されている2)。

三熊山は濃い緑に覆われた薄暗く、深く、スダジイ、カゴノキが茂った静寂な山で、クチキコオロギは、常緑樹の樹皮や芽をたべるという[2)]。県下では、故山崎千里氏により、1931年三原郡南淡町福良湾の煙島で仲間とともに日本で初めて発見された2)。兵庫では他に、揖保郡御津町（現たつの市）で確認されている（2003）[2)]。兵庫県のレッドデータCランク（2003）[3)]。

これからのこと、課題、展望

さて、この個体をみつけた武庫川渓谷は、兵庫県下で第3番目の産地になるのか。当地での生態面の解明にはどうすればよいのか。現地の調査にあたっては、バッタ目の専門家、この方面の調査研究している団体と接触して、調査を推めたいと考えている。

校閲には、田中哲夫先生にたいへんお世話になった。厚くお礼を申し上げる。

＜参考文献＞

1）日本直翅学会編（2006）バッタ・コオロギ・キリギリス図鑑、北海道大学出版会発行
2）神戸新聞写真部・編著（2003）ひょうご身近なレッドデータいのちのまほろば、神戸新聞総合出版センター発行
3）兵庫県県民生活部環境局自然環境保全課編集（2003）改訂・兵庫の貴重な自然―兵庫県版レッドデータブック2003―、（財）ひょうご環境創造協会発行